

Title	アラビヤ語に於ける「神」の墮落
Author(s)	田中, 四郎
Citation	大阪外国語大学学報. 6 p.154-p.164
Issue Date	1958-04-01
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80142
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

アラビヤ語に於ける「神」の墮落

田 中 四 郎

On the Degenerate Uses of the Word 'Allāh' in the Arabic Language.

By Shiro Tanaka

S U M M A R Y

The Supreme Being that Islamites worship is called 'allāh' in Arabic. They believe that Allah is the highest and absolute authority governing the whole universe, and their guiding principle of life is to lead their lives praising and relying upon Him. Their life is strictly regulated by the Koran in many ways because they believe in the Book as the complete record of His words.

But on such occasions of their daily life as are less religious, they use the word 'allāh' in an extremely careless manner. An observation of how the word is used, that is, the place, time, frequency as well as the speaker's feeling and mental attitude, will unmistakably lead to the conclusion that they often use this word in very degenerate senses, as customary or rhetorical uses, and more positively as a means of rationalizing their negligence or evading their responsibilities.

In this paper, such degenerate uses of the word 'allāh' are illustrated with actual examples to prove that on the surface or in their literal senses these expressions seem to show the Islamites' profound sense of awe toward Allah, but in reality the very reverse is the case. The author also ventures his personal opinion on the causes of the growth of such usage.

本稿にて用いる発音記号とアラビア文字との対照表は次の如し。

ص	ش	س	ز	ر	ذ	د	خ	ح	ج	ث	ت	ب	أ
'	b	t	θ ^(t) _s	j(g)	h	x	d	ð(d)	r	z	s	ʃ	ʕ
ي	و	ه	ن	م	ل	ك	ق	ف	غ	ع	ظ	ط	ض
d	t	z	'	g	f	q	k	l	m	n	h	w	y

括弧中の記号は、本来その前の記号で表さるべき文語音が口語に於いて変化する音を表し、また長母音は各短母音記号の上に短い横棒を附して表示する。

神には墮落も向上もない。稿題の「神の墮落」とは「神を意味する語の墮落」の意味であり、アラビア語に於いて「神」を意味する語が、それを生活用語とする民衆の日常生活の中で極めて軽薄、無造作に、時には責任忌避の手段としてさえ使用されている現状の一考察である。従って、「神を意味する語の墮落」と言わんよりは、『神に対する讃仰畏敬の念を疎薄にし、「神」なる語に本来備わりおりし神聖さ尊厳さを毀傷喪失して、この語を用い居る人間の墮落的の使用に関する一考察』と換言する方が本稿の内容に近い。而して本稿にいう「神」とは、イスラーム教の信仰対象にして、教徒達が唯一無二、無疆遍在の一大靈格と信じいるアラビア語の *allāh*^u を指す。

また引用する口語アラビア語の発音は、エジプトの首都カイロに於ける一般大衆の日常語に基準を置く。口語アラビア語には、地域的、階級的相違により、その発音、語彙、語法等の上に少からぬ相違が見られるからである。

allāh^u なる語の墮落的用法を考察する為には先ずその語の成立過程、並びにその語が表す本来の純粹正確な意味及び価値を示現せる用法を概観するのが順序であろう。

イスラーム教徒の学者中には、*allāh*^u なる語にはそれが源となる他の語は存在せず、この語はそれ自体独立した神聖なる 唯一絶対神の 名称であるとして一切の語源説を 否定するものがあるが、これは我々の傾心承持すべき説ではない。また *allāh*^u は *al* と *lā* と *hu* の三語の合成語にして、*al* は定冠詞、*lā* は「虚無」を意味する語、*hu* は「彼」を意味する人称代名詞ゆえ、*allāh*^u とは「虚無は彼なり」の意味なりとする奇想の説や、それが語源動詞を *waliha* (‘‘当惑する、とまどう、途方に暮れる、’’) の意味に求め、*allāh*^u の余りの偉大さのゆえに、人間が「当惑させられ、とまどわされるもの」の意味より発したとするもの等種々である。然しこの語の成立過程は次に述べる説が最も妥当と考えられる。

アラビア語の動詞中に *'aliha* なる語あり、この語は“仕える、崇拜する、”の意味を持つ。こ

の動詞より派生した受動意を持つ名詞 'ilāh^{un} (従ってこの語は、“仕えられるもの、崇拜されるもの、”の意味となり、“普通の神、”を意味する。またアラビア語の、所謂 fi'alun 型名詞で、受動意を持つものは他にもあり、kataba “書く、記す、”より出た kitābun が“書かれるもの、本、”を意味し、xataba “伝える、説く、”より出た xiṭābun が“講演、手紙、”を意味するが如きはその一例である) に定冠詞の al を接頭して al'ilāh^u なる語を作り、定冠詞の接頭によりて在来の“普通の神、”を意味する 'ilāh^{un} と区別した。この al'ilāh^u の母音 i が前へ位置を移して ali'lāh^u となり、'音消失で alilāh^u、更に i 音消失で allāh^u なる語が出来た(この過程と同じ母音転位、'音消失、母音消失は、“天使、”を意味する malakun なる語にも見られる。mal'akun→mala'kun→malakun) とするものである。従って、在来の“普通の神、”を意味する語 'ilāh^{un} には 'ālihat^{un} なる複数形が存在するが、在来の神と区別された“唯一神、”allāh^u にはそれが無い。

次に、allāh^u が万象を支配する至高至大の絶対的靈格なる事を示顕せる用法は、あらゆる種類の記述中に無数に見出し得るが、イスラーム教徒達が allāh^u の啓示の完全な記録と信じ、彼等の全生活を強く規制しているコーラン中よりその二三の章句を引用するのが最も適切であろう。

コーラン第一章 sūratu_l-fatīḥati

bismi_l-lāhi_r-raḥmāni_r-raḥimi

al-ḥamdu lillāhi rabbi_l-'ālamina① ar-raḥmāni_r-raḥimi② māliki yaumi_d-dini③
 iyyāka na'budu wa_iyyāka nasta'inu④ ihdina_ṣ-ṣirāṭa_l-mustaqīma⑤ ṣirāṭa_l-laḏīna
 an'amta 'alaihim⑥ ḡairi_l-maḡḏūbi 'alaihim wa_la_d-ḍāllina

(試訳)

大慈大悲のアッラーの御名に於いて

万物の主にして、大慈大悲なるもの、また審判の日の王者たるアッラーに栄光あれ。われら
 汝をこそあがめ、汝にこそ救いを求めん。願わくばわれらを正しき道に導き給え。汝が恵み
 を垂れしもの、即ち汝の怒りを買わず、また正しき道よりそれ迷わざりし者の歩みし正しき
 信仰の道に。

コーラン全巻の精粹にしてその誦吟はコーラン全 114 章の読誦に匹敵すると言われるこの開巻の章は、イスラーム教徒達の日々の礼拝時に頻繁に愛誦されている。この章の冒頭には、allāh^u の属相が「万物の主、大慈大悲なるもの、審判の日の王者」なる三様の修飾句で示されているが、これは allāh^u が万物を支配する宇宙最高の権威であり、総てを愛しいつくしむ御めぐみ深き存在であり、更に一切を識りてそれを審判する智慧の所有者あでる事を示している。allāh^u の属相を示す表現は、これ以外にも、真理、無比なるもの、最初のもの、至高のもの、創造者、天地の

光、全き智慧、万物の守護者、人の王、人間の主、力あるもの、聖なるもの、永遠なるもの、安心を与うるもの、平和なるもの、幸福の源などの名称で、コーラン中に屢々出ているが、いずれも allāh^u が他に比ぶべきものない絶対神である事の表現に外ならない。イスラーム教徒達はその勤行中に、あるいは困難、苦痛、悲しみ、恐怖等に遭遇した際に、屢々 allāh^u akbar (“アッラーは偉大なり”の意味) なる題目を口にしますが、これも絶対神 allāh^u への讃仰と帰依の告白であり、世の中の一切事が悉く allāh^u の意志によりて生じ、個人の意志ではどうする事も出来ないという諦観の自分自身に対する言い聞かせである。この句を口ずさむ事により、彼等は精神的平穏を得、忍耐し、更に事に処する新たな力と勇気とを心の中に湧かせている訳である。

コーラン第百十二章 sūratu_l-ixlāṣi

bismi_llaḥi_r-raḥmāni_r-raḥīmi

qul huwa_llaḥu aḥadun① allāhu_ṣṣamadu② lam yalid wa_lam yūlad③ wa_lam yakun lahu kufuwan aḥadun④

(試訳)

大慈大悲のアッラーの御名に於いて

言え！アッラーは唯一なり、アッラーは永遠なり、生みし事なく生まれし事なく、それに比すべき何ものもなし。

マホメットは多くの機会にキリスト教に接し、且つそれより得るところも少なくなかったと推察される。事実、コーランの中には、キリスト教より受けた影響が種々の形でその痕跡を残している。然しこの章は、彼がキリスト教的なものより脱し、「神の子」たるキリストの教儀とは対蹠的に「神は生まず」と宣言し、「神の使徒」として立った彼の強い自覚をそこに表明断言している点で極めて注目される。イスラーム教徒達が入信の宣誓に、また allāh^u 信仰の第一義を表わす句として常に口にする lā 'ilāha illa_llaḥ muḥammadur_rasūlu_llaḥ (アッラーの外に神なく、マホメットはアッラーの使徒なり) なる句と共に、この章は allāh^u の一元性の最も簡潔直截的な、而も力強い表現であり、十一個の1音に整えられた原文の響きもまた極めて力強く流麗、それを誦する吾人の心に、喰いこむが如く、被いかぶさるが如く、強く迫ってくる独得の調子を持っている。

その他、コーランの中には多くの章に allāh^u の諸相が、時には実例を、時には多様の比喩を用いて織述されているが、究極のところそれごとく allāh^u の一元性と、それが宇宙万物を支配する超越的絶対神である事の詳述である。イスラーム教徒達が好んで用いる格言に naḥnu fi_t-tafkiri wa_llaḥu fi_t-tadbiri なる句があるが、これは“私達はいろいろ考え、思いめぐらす

けれども、総ては既にアッラーが決め定めておられるのであって、何事もアッラーの予定通りに運ばれてゆく、の意味であり、その根底にあるものは allāh^u の絶対性を認め、それが支配に対する全一的な信頼の表現に外ならない。

コーラン第百十四章 sūratu_n-nāsi

bismi_llaḥi r-raḥmāni_r-raḥimi

qul a'ūḏu bi_rabbi_n-nāsi^① maliki_n-nāsi^② ilāhi_n-nāsi^③ min farri_l-waswāsi_l-xannāsi^④ allaḏi yuwaswisu fī ṣudūri_n-nāsi^⑤ mina_l-jinnati wa_n-nāsi^⑥

(試訳) 大慈大悲のアッラーの御名に於いて

言え！ われは行かん、人の主、人の王、人の神たるアッラーの許へ。胸うちに悪をささやく悪魔より逃れ、はたまた悪霊より、人間より逃れて。

この章にいう「悪魔、悪霊」等の語は、人間の心の中に湧き出ずる悪への誘惑、害心等を指し、「人間より逃れて」とは、人間の犯す諸々の罪穢より逃れての意味と解釈される。而うしてこの章の真髓は、allāh^u の懷にのみ無碍無障安心立命の境地があるゆえ、人間世界の諸悪行より逃れてその総てを allāh^u にまかせゆだねんとの、allāh^u への全一的な帰依の気持が表わされている。この章の原文、また十個の s 音を連ねて、それを誦する者の心奥を揺さぶる独自の響きを持っている。

以上に記述せしところより、イスラーム教徒達の allāh^u に対する意識および態度が如何なるものであるか、またあらねばならぬかが理解され得ると思う。然もアラビア語使用民族の大部分がイスラーム教徒である事を考える時、アラビア語に於ける allāh^u なる語の位置及び価値は明白であろう。

然るにこの allāh^u なる語が、宗教的行事または宗教的観念を強く伴わない日常生活に於いては如何に用いられているか、先ずその実例の若干を記述する。

人の訪問を受けた際、“ようこそお越し下さいました、”の意味には（原文を直訳すると）、

▽あなたは私達に光を与えた。

nauwart 'alēna.

▽あなたは私達を喜ばせ、名誉を与えた。

ānestena w_ḡarraftena.

▽(あなたのお越しで) 幸福がやって来た。

ḥallet_el-baraka.

なる表現が屢々用いられるが、これらに対する返事には、それぞれ紋切り型のきまりきった挨拶

用語,

▽アッラーがあなたに光を与えているのです.

allāh yēnauwar ‘alēk.

▽アッラーがあなたを喜ばせ、名誉を与えているのです.

allāh yānesak w_ʾyefarrefak.

▽アッラーがあなたを祝福しています.

allāh yebārek fik.

が用いられる. いずれの場合にも、光や名誉を与え、喜びや幸福をもたらしたと相手に考えられている主体の自分は姿を消し、代りに allāh^u が登場している. “少しもお訪ね下さいませんでしたね,, に相当する表現の,

▽あなたは私達に淋い思いをさせた.

auḥaḥfena.

に対する返事は,

▽アッラーがあなたを淋がらせなかった.

lā auḥaḥf_ʾallāh mennak.

であり,

▽アッラーがつつがなくあなたを送り届けるでしょう.

allāh yewaddūk be_xēr.

▽アッラーはあなたと共に在るでしょう.

allāh yekūn ma‘āk.

▽アッラーが安全にあなたを到着させるでしょう.

allāh yewaṣṣelak be_s-salāma.

▽アッラーが無事にこの旅を完了させるでしょう.

allāh yetammem ‘alēk be_xēr.

等は、いずれも旅行に出掛る人を見送る時の“行ってらっしゃい,, “どうか御機嫌よう,, に相当する離別時の挨拶言葉である. これに対し出発者が, “いってきます,, の意味に使う言葉は,

▽アッラーはあなたを守護するでしょう.

allāh yesallimak.

allāh yehfazak.

▽アッラーが私達を会わせて下さるでしょう.

allāh yegma‘na ‘alēk be_xēr.

▽アッラーの御心があればお目にかゝれましょう.

in fā’_ʾallāh nefūfak be_xēr.

であり, “お帰りなさい,, “無事なお帰り何よりです,, に相当する言葉は,

▽無事にあなたを帰らせたアッラーに栄光あれ。

ḥamd_ellāh 'a_s-salāma.

である。何れの用例に於いても、常に allāh^u が行為の主体となり、相手や自分はその客体となっている事が目立つ。

かくの如く、相手に対する allāh^u の行為や意志、又は allāh^u に対する自己の意志を宣べる事によりて、間接に自己の意志や状態を相手に伝達する用法はかなり多い。

▽アッラーの御加護があります様に。

fi amāne_ellāh.

▽アッラーの御手にあなたをゆだねました。

estauda 'nāk_allāh.

は、いずれも“さようなら”の意味、

▽アッラーはあなたに健康をもたらずでしょう。

allāh ye'afik.

は、“おやすみなさい”の意味、

▽アッラーはあなたの財産を増すだろう。

kattar xērak.

は、“ありがとうございます”の意味、

▽私はアッラーに許しを乞い願う。

astaġfar_allāh.

は“どういたしまして”の意味に用いる。これは、“あなたにお礼を言われる様な事は極く僅かで、むしろ反対に、私の犯した数々のあやまちに対し私はアッラーにお許しを乞わねばなりません。だからあなたは私にお礼を言われる必要など無いのです”の意味より出たものである。この“アッラーに許しを乞い願う”なる意味の表現, astaġfar_allāh は、人との応対中にげっふやあくびが出たり、その他相手に失礼と思われる事があった時にも、“失礼いたしました”の意味に屢々用いられる。

以上、日常生活に於いて頻繁に用いられる事例の若干を記述した。これらの用例をたゞその辞義のみを辿りて表面的に観察すると、allāh^u に対する彼等の讃仰、畏敬、帰依の念が強く明白に表示されており、一見コーラン中の allāh^u に対すると同じ意識を彼等が持っているかに見える。事実、世の一切事は allāh^u の計画通りに運ばれ、個人の意志希望ではどうする事も出来ないという徹底的な宿命観、摂理観が、彼等の心底深くしみ透り、それが彼等の生活全体を強く規制している事は疑うべくもない。然し徹底的な宿命観摂理観より生じ、慣用せられるに到ったこれら allāh^u 中心の種々の表現が、今日の民衆の日常生活の中で、如何なる感覚、如何なる精神的姿勢

で実際に使用されているかに問題が存在する。

くしゃみをした人に、

▽アッラーがあなたに御慈悲をお垂れになった。

arhamak_uallāh.

と言って相手を喜ばせたりその恐縮を上手にほぐし、共にアルコール類を飲んで、

▽アッラーがあなたを幸福にする。

hanākum allāh.

と歓声をあげ、もの乞いする乞食をことわるにも、

▽アッラーがお前に恵んで下さるよ。

allāh yeftah_u 'alēk.

▽アッラーにおすがりしろ。

'ala_ullāh

と、allāh^u の方に向きを変えさせるが如き用法を聞くと、それが使用される空間的・時間的位置に於いて、既に宗教的行為中に彼等が対する allāh^u への純粹な意識とはいささかずれた感覚でそれを用いている事を誰しも感ずるであろう。この事は、程度の差こそあれ先に記述した allāh^u を主体にして自己および相手を客体的な位置に置く多くの表現に於いても言い得る事である。今日、それらの表現を実際に舌に乗せ、また耳にしてそれに応対している人々の、その時、時の心理状態を考察すると、そこには勿論、積極的な軽視意識や墮落的な使用意志が働いていない事は明白である。然し無意識裡に allāh^u に対する消極的な軽視乃至は無頓着がその場に漂漾している事を否定する事は出来ない。

さきに列挙した例句のみで斯かる推論を下す事は極めて主観的印象的であり、その根拠が脆弱であるとの謗りを免れ得まい。然し allāh^u なる語の墮落的使用を、より明確に推察させる用例、並びにそれら特殊な表現の使用される頻度に就いて考える事は、さきに下した推論を導くのにより重要な一素因となり得るであろう。

ある語句の使用範囲及び使用頻度の拡大増加、即ち通俗的慣用が、その語句の持つ意味を弱め凡俗化する傾向は我々の周囲にも数多くの例を見出す事が出来る。「先生」、「奥さん」なる語がその社会的地位をおとし、「有難う」なる語が“稀である、めったにない”、という本来の意味を喪失し、「お蔭様で」なる語が、“神仏の加護”、をほとんど意識されずに用いられているが如きは、いずれもその通俗的慣用が原因である。さきに記述したアラビア語の“ようこそお越し下さいました”、“少しもお訪ね下さいませんでしたね”、“いっていらっしやい”、“いってきます”、“さようなら”、“お帰りなさい”、“おやすみなさい”、“ありがとうございます”、“どういたしま

して,, “失礼いたしました,, 等の言葉は、いずれも日常生活に極めて関係深い言葉であり、従ってそれが使用される範囲並びに頻度は広く激しく、為にそれらの特異な表現が用いられ初めた頭初に持っていた意味の清新さは、その句の使用反復に従って次第に失われ、凡俗化していった事は間違いない。

日本語の「お蔭様で」に相当するアラビア語は、al-ḥamd lillāh で表現される。“アッラーに栄光あれ,, というのが元の意味であるが、種々の表現の前後に置かれて、

al-ḥamd lillāh be_xēr.

▽お蔭様で元気でおります。

nagaḥt fi_l-emtehān al-ḥamd lillāh.

▽お蔭様で試験に合格しました。

の如く、極めて頻繁に使用されている。それぞれ、“元気である事は allāh^u のお蔭ゆえ、その allāh^u に栄光あれ,, “試験に合格出来たのは allāh^u のお蔭ゆえ、その allāh^u に栄光あれ,, というのが本来の意味である。然るに述べんとする事柄の内容が、大略相手に理解され得ると予想される場合には、その事実の説明辞句を一切省略し、al-ḥamd lillāh なる句のみを使用して事を弁じる用法を屢々耳にする。

(A) 無事にお帰りでしたか？

(B₁) aiwa, al-ḥamd lillāh.

はい、おかげさまで

(A) それは結構でしたね、体の調子はいかがですか？

(B₂) al-ḥamd lillāh.

おかげさまで

(A) 奥さんはお変わりございませんか？

(B₃) aiwa, al-ḥamd lillāh.

はい、おかげさまで

(A) それは何よりです、時に商売の方は……？

(B₄) al-ḥamd lillāh.

おかげさまで

の如くである。(B₁) には、“無事に帰りました,, (B₂) には、“調子はとてもよろしい,, (B₃) には、“家内も元気にしております,, (B₄) には、“順調にっております,, に相当する句が省略されている訳である。かくの如く事実の説明辞句は全く姿を消し、“アッラーに栄光あれ,, なる句のみが残り用いられている事は、一見、allāh^u なる語の重視と、allāh^u に対する意識の強烈さを示しているかに見えて事実は逆である。総てを al-ḥamd lillāh で片付け而もそれが口の先

で極めて軽い調子に話される事は、allah^u なる語を用いつゝも allāh^u なる語の軽視であり、そこに「allāh^u なる語」は存在するも、それを用いる人間の意識中に「allāh^u」は存在しない。万一存在するとしても、それに対する意識は極めて薄弱で、ただ調子のよい al-ḥamd lellāh なる句が、習慣的に彼等の口先よりこぼれ出ているに過ぎない。

al-ḥamd lellāh と並んで、彼等がその日常生活の裡に屢々用いる en fā' allāh なる句がある。“もしアッラーが望み給わば、”というのが本来の意味である。然しそれが実際の用法は、

“ひるから一緒に出かけませんか”と誘うと、

(A) biddi arūh waiyāk, en fā' allāh.

一緒にゆきたいですね

“あす御出発になるのですか”と尋ねると

(B) aiwa, asāfer bukra, en fā' allāh.

はい、明日出発いたします

“この品を明日届けて下さいよ”と依頼すると、

(C) aiwa, agībha lak, en fā' allāh.

はい、お届けいたしましょう

の如くで、何れの場合にも、相手に対する実質的な返事の後に en fā' allāh なる句が附随している。この句を、常に日本語の「出来たら……」と訳してはまずく、さりとて「アッラーが望み給わば」では会話にならない。彼等は一体、如何なる意識、如何なる感覚でこの句を用いているのであろうか。

勿論、この表現をその成立に遡って考えると、「今」以後の事は一切が予測され得ず、総てがこれ allāh^u の意志一つに左右されとのイスラーム教の厳しい摂理観がそこに存在した事は是認せざるを得ない。この事は en fā' allāh なる句に限らず、allah^u なる語を含む既述の表現の多くに就いても言い得る事で、総てが allāh^u の意志一つにかかるとする徹底的な宿命観は、イスラーム教の伝播と共にその土地の民衆の一人一人の心の底に強く込みこんでいたものと推察される。民衆がかゝる観念の底層を形成しているのでなければ、たとえある個人が allāh^u を主体にしたかゝる新奇な表現を用い出し、それを聞いた若干の人々を感心させ得ても、それが民衆の間に採用され、命を得て今日まで長く存続する筈がないからである。

然るに今日この句を用いている時の民衆の意識は、たとえそれが積極的なものではないにせよ多分にその内容を貶下させている。この事は、さきに記した三様の例に於いて、その返事の内容が後刻実行し得なかった場合を想定すれば理解に便利であろう。即ち彼等は、全く本人の個人的支障かその他の理由で、同道（Aの場合）、出発（Bの場合）が不可能となった場合にも、そはれ

「アッラーが望み給わなかった」からであり、本人の怠慢により品物を届け得なかった場合（Cの場合）にも、それは「アッラーが望み給わなかった」からであると言訳する、また言訳し得る為の事前準備としてこの en fā' allāh なる句を用いているからである。その膝下に跪き、その御心に従って生活せねばならぬ絶対神 allāh^u を、彼等は自己の生活の方便として用いている、換言すれば、彼等は自己の約束不履行や過失の弁解、時には責任回避の為の手段、道具として allāh^u を利用しその名を騙っているのである。これが allāh^u なる語の墮落的用法でなくて何であろう。万一それが自己弁解や責任回避の為ではなく、また allāh^u の予定説を強く意識しない単なる習慣的、修辭的な使用であるとしても、そこには allāh^u なる語を日常茶飯的に、軽々しく無造作に用いる墮落が存在している訳である。

神の讃仰、神との対話は、それへの祈りと同じく、孤絶の場に於いて己れの心の内に真摯に為さるべきものであり、他を意識し他に聞かせんがために為させるべきものではない。いわんや自己の立場の弁解や責任回避の為にその名を騙りそれを引用するが如きはその墮落的用法の最たるものである。

彼等は“元気でいます、”、“事は順調に運んでいます、”を表わすに afkur allāh (“私はアッラーに感謝しています、”の意味)と言ひ、“それは結構ですね、”と相槌を打ち上手口をたゞく際にも ma fā' allāh (“それはアッラーの欲し給うところだ、”の意味)と表現し、日常生活の喜怒哀楽は勿論の事、種々の意表や感情ことごとくの表現に allāh^u を利用して終にその価値を貶下させる結果に導いてしまった。神の墮落ではなく、神を意味する語の墮落でもなく、神を騙り神を利用する人間の墮落である。

以上、allāh^u なる語の墮落的用法に関する一私見を記述した。問題はなお、斯かる墮落的用法をアラビヤ語使用民族の間に蔓延させた原因の解明に残されている。然しそれが解明には、先ずアラビヤ語使用民族の持つ一般的觀念及び共通的感情が明らかにされねばならず、それが為には更に、それら民族の居住地域の風土、並びにそれら民族の置かれた歴史的位罫に対する広く正しい考察が為されねばならないであろう。